

PM_{2.5} 問題に対する日本エアロゾル学会の対応と Q&A

平成 25 年 1 月に中国において広い地域で高濃度の PM_{2.5} が観測され、日本でも西日本を中心にわが国の環境基準値(1 日平均 35 µg/m³)を越える濃度が見られたことから、越境大気汚染による PM_{2.5} についての関心が急速な高まりを見せた。PM_{2.5} とは粒径が 2.5 µm 以下の**エアロゾル**(大気中に浮遊する微細な粒子)のことであるが、この分野の専門家を数多く有しこれまでに数多くの研究を進めてきた日本エアロゾル学会では、今般の事象に対して様々な憶測や一般市民の恐怖感を煽るようなマスコミ報道も見られるため、本学会の会員である専門の研究者が PM_{2.5} に関連する、一般市民にも関心の高い事柄を科学的な知見に基づいて平易に解説し、本学会ホームページ上で提供することにした。ご覧頂ければ幸いである。また、さらに詳細な情報をお求めの場合は各執筆担当者をご紹介することも可能なので、学会事務局にご照会いただきたい。

PM_{2.5} の環境基準が制定されたのは平成 21 年のことであり、一般市民にとっては PM_{2.5} が耳新しく、また理解しがたい言葉であったことと、中国において極めて高い濃度が観測されたことから、非常に危険なものが発生し、健康に被害を及ぼすおそれのある物質がわが国にも高濃度で押し寄せてくるかのような錯覚にとらわれ、恐怖心に駆られる事態となったことはやむを得ない面もある。しかしながら、現時点での日本においては非常に深刻な状況に立ち至っているわけではないので、落ち着いた対応と、何よりも中国の国民は非常に深刻な事態に直面していることに思いを致すべきだと考える。わが国には過去の公害問題を解決してきた経験と技術やノウハウの蓄積がある。中国における様々な被害の軽減に協力し、またこれに呼応した同国政府の対応が取られることが第一である。

本学会は、これまでに、エアロゾルの発生、測定、輸送、生体影響、暴露防止などのエアロゾルに関するさまざまな研究を行ってきた。特に、長距離越境大気汚染とその影響などに関する研究を、文部科学省科学研究費補助金による特定領域研究や新学術領域研究に基づく大型のプロジェクトによって会員を中心に進めてきた。また、個人への対策において重要となるフィルタ(マスク)や空気清浄機その他の技術については本学会に多くの研究者がおり、世界でもトップクラスの研究を行っている。これらの情報や共同研究の場を広く社会に提供することにより、PM_{2.5} の高濃度汚染とその影響の解明、対策の実施に対して本学会が貢献できるよう、会員一同願っているところである。

日本エアロゾル学会会長

畠山史郎

(東京農工大学大学院・農学部環境資源科学科 教授)